

美術科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 美術科では、「感性豊かに創造していく人」を育みたいと考えている。「感性」とよく似たもので「感受性」という言葉がある。この2つはしばしば同じような意味で使われる場合が多いが、日本語大辞典（講談社）によると「感受性」は「外界の刺激を印象として心に感じ取る能力」, 「感性」は「心理学で外界の刺激を受けてそれに対応する感覚内容をまとめる働き。哲学で悟性ととともに認識能力を形づくる心の働き」とある。「感受性」は「感覚」の意を受け, 「感性」は「理性, 判断」の意を受けていることがわかる。つまり, 人やもの, 出来事, 作品, 景色などに出会って, 何事かを感じ取る (input) ことにとどまらず, それを理性が咀嚼し, 何らかの形で表現する (output) ことで, 初めて豊かに感性が働いていると言えるのである。子どもたちには, 美術館に展示される作品のような特別なものに限らず, 身近に当たり前に存在する美しさに気づける人になってほしい。夕焼けを見たとき, その感動を絵手紙にして誰かに送ったり, 隣にいる人に「あのグラデーションがとても綺麗だね」と言葉で伝えたり, 一瞬の色合いをスマートフォンのカメラに収めたりするなど, 感じ取ったことを自分なりに表現して誰かと共有できる豊かな感性をもった人を育みたい。そして感性を豊かに働かせ, 発想したり表現したりしながら, 自分で未来を創造できる人間になってほしいと願っている。

2 教科ならではの文化

20 人類最古の絵画と言われるラスコー洞窟の壁画が描かれたのは, 約2万年前だと言われている。洞窟の壁に色鮮やかに描かれた牛や馬は, 2万年前の人類が感性を豊かに働かせながら創造したものだと思うと, 時空を超えた美しさに心が揺さぶられる。長い歴史の中で, 人間は世の中の様々な対象や事象を色彩, 形, 光などの造形的な視点で捉えることで何事かを感じ取り, その上で深い思考を経て新たな意味や価値を紡ぎ出してきた。私たちが表したいという思いをもって描いたりつくったりすること, 対象や目的を意識してデザインをすること, 美術作品を鑑賞したりすることなどは, すべて新たな意味や価値を創造する営みであると言える。ここで言う「新たな意味や価値」とは, 今まで自分の中になかった色や形に関する造形的な見方や考え方, そして新たに見つけた自分や他人の個性やよさのことである。以上のことをふまえて, 美術科ならではの文化とは「物事を造形的な視点で捉え, 感性を豊かに働かせて創造する営み」であると考えている。

30

3 願う子どもの学び

ほとんどの子どもたちは, 画家やプロのデザイナーを目指しているわけではない。言うまでもないが, 義務教育における美術の授業の目的は, 美術の専門家を育成することではない。子どもたちが「美術を学ぶ」ではなく, 「美術で学ぶ」授業を目指していきたい。そのために, 教師は知識や技能を教える存在というよりは, 美術科ならではの文化を教室に持ち込むことで, 気づきのきっかけを与える存在でありたいと考えている。造形的な視点をもって試行錯誤をしながら表現をしたり, 鑑賞をしたりする過程で, 子どもたちは多くの気づきを得るだろう。「筆をこう使うとこんな効果が出るのか。次はこうしてみたらどうだろう」「当たり前の日常の中にこんなデザインが存在しているんだ。見慣れた街の見え方が変わった」「ピカソってただめちゃくちゃな絵を描く人だと思っていたけれど違うのかもしれない」など, 子どもたちは, 様々な気づきを得ながら input と output を繰り返し, 今まで自分の中になかった新たな意味や価値を見いだしていくだろう。そして, その積み重ねによって自分自身の感性が豊かになっていくことを実感できたとき, 子どもたちにとって美術科の学びが生涯にわたって学び続けようと思える価値あるものになるのではないかと考えた。それは, 上記の「教科で育みたい人間像」にもつながる。以上のことから, 美術科で願う子どもの学びを「試行錯誤や対話を繰り返し, 造形的な気づきを重ねながら, 新たな意味や価値を見いだすこと」とした。美術で学ぶ子どもの姿を常に頭に思い浮かべながら, 題材設定や授業改善に努めていきたい。